

令和6年度 第3回 平塚市博物館協議会会議録

■ 開催日時 令和7年3月21日(木) 午前10時～11時40分

■ 開催場所 平塚市博物館 特別研究室

■ 会議出席者(敬称略)

会 長 小倉 俊宏

副会長 藤吉 敬子

委 員 金子 淳、広谷 浩子、山田 美保、大田 幹司

事務局 石川社会教育部長、浜野博物館長、川端館長代理(学芸担当長)、坂田館長代理(管理担当長)、近藤館長代理(市史編さん担当長)

■ 傍聴者 0名

■ 会議の概要

1 開 会 社会教育部長挨拶

2 議 事

(1) 報告事項等について

- ・ 令和6年度秋期特別展について
- ・ 令和6年度第24回文化祭について
- ・ 情報発信(ホームページとYouTube・SNS)について
- ・ 平塚市史年表編刊行について

(2) 令和7年度予定について

- ・ 令和7年度当初予算について
- ・ 令和7年度事業計画について

(3) その他

- ・ 事務連絡等

3 閉 会

■ 議事及び質疑

議題(1) 報告事項等について

◆令和6年度秋期特別展の開催報告について事務局から説明資料により説明。

委 員 展示解説ボランティアをしている。若い親子連れを案内すると、特別展示室に入っすぐの大きな子供を抱っこしたお地蔵さんに、お母さんたちは皆、合掌していた。どちらかというと知的好奇心を満たすというよりも心に訴える展示と感じた。子どもを抱っこしたお地蔵さんはあまり知られていなかったのか、子育て地蔵を見て子どもも喜んでいたり、大人も珍しがっている感じだった。一方、「昔、まわり地蔵を経験した」という年配の親子連れも2組いた。事務局の説明にもあったが、展示室内に流れていた念仏の音は効果的で良かった。可能であればお

香の匂いもしたら五感を刺激する良い展示方法だったと思う。

委員 この展示はマクロとミクロの両方の視点があり、平塚市民はミクロの視点で自分の思い出と絡めて見られるし、市外からの観覧者は大きな地域の流れの中でまわり地蔵の習俗をマクロの視点で捉えることができる展示で面白かった。配付資料の主旨の一番最後に、「平塚市域に住む人々の身近な信仰の形を紹介した」とまとめているが、平塚市とその周辺の関係が面白かったので、平塚市だけというまとめ方は残念に思った。おさまりの良い言葉を最後に遣ったのだろうか。アンケートを興味深く読んだが、アンケートの評価をすることは非常に難しい。例えば「子どもにはわかりづらい」との記入には納得がいく。今回も子どもには難しい内容だったので基礎知識がなくてよく分からなかったのだと思う。子どもをアンケートの対象から除外するなど、誰を対象にどういう評価をして欲しいのかを明確にすると、後々データとして活用できると思う。

事務局 「子どもにはわかりづらい」と記入したのは実際に小学生だった。「展示内容が難しい」と記入したのは、50代の女性だった。

委員 子どもの観覧者の割合が高かったというのは嬉しい。アンケートにも関わるが、子どもにとっては難しい内容であっても、音声を聴き、観覧者が手を合わせる姿を見ることで五感が刺激され、それらが積み重なって知識や感情が醸成される過程にあるので、子どもの成長にも大きな影響を持つ展示だったと思う。また子どもは身近な地域を意識するので自分の生活地域にあった風習を知ることは良い影響を与えると思う。

委員 タイトルの「おうちをまわるってどういうことで何なのかわからない」とアンケートにあったが、観覧してタイトルの意味がわかった。展示が終わった後に丁寧にアンケートのまとめをしているのは、次に繋げるという意味でとても良い。

委員 以前から館長に教えをいただいていた関係もあり、今回の展示では纏にある宗源寺の撮影に協力させていただいたが非常に良い経験になった。自分が携わったものが展示され嬉しく思った。アンケートの中にも「興味が湧き、現在では薄くなりつつある信仰の保存を強く願う」「曾祖父の名前があった。」ということから、地域に根ざした様々な掘り起こしをした展示を嬉しく思う。私も色々な地域のことをいわゆる古老から聞くが、平成になり更にはコロナになり人が亡くなり、続いていた講や行事が細々としか続いていない所が多い現実を目の当たりにしている。今回の「まわり地蔵」という、平塚の街の方に住んでいては知り得ないような情報、多くの展示品を見せていただいたのは嬉しく感激した。今後も平塚に古くから伝わる民俗行事を色々な側面から発掘し展示することで、若者の博物館への興味関心も広がり、大事にしようという気持ちにつながっていくのではないかな。

◆令和6年度第24回文化祭について事務局から説明資料により説明。

委員 アンケートにあった活動報告会での指摘について実際に私もその場において思ったことだが、発表者がタイムオーバーしているのに自分の準備した資料をすべて発表しないと気が済まなか

ったということがあった。進行を考えた方が良くかもしれない。私は展示解説ボランティアで実演したが、集客が必要なので声掛けをした。15～20 分前に声を掛けると足を運んでもらえる。5 人以上集まると他の来館者も興味を持ち、また集まってくることがわかった。

委 員 今回は 16 団体が参加したと文化祭のしおりにあるが、何をもって参加とするのか。

事務局 展示、活動報告会、実演、見学会と 4 つに大きく分類している。そのどれかに参加したグループが全 16 グループになる。

委 員 展示の中で、展示とポスター展示があるがその違いは。

事務局 展示は、一定量以上の活動内容や成果を並べて見せているもので展示室内に展示している。ポスター展示は、展示室の外側の廊下に活動内容を紙（ポスター）にまとめて発表しているもの。

事務局 文化祭は参加グループが減少傾向にあるため、今回は全 16 グループに何らかの形で文化祭に参加してもらうことを目標にし、年度の初めから担当者が年間のグループ活動に負担を掛けずに参加できる方法などについて意見を聴きながら進めた。

委 員 全体像がわかった。

委 員 私も他の委員同様、文化祭に参加した。活動発表の会場が「寒かった」とアンケートに記載があるが、確かに会場の北側の窓が開いていた。また、発表時間が延びて次のグループの発表が短くなることもあったので、リハーサル等段取りを良くし、来年もタイムスケジュールなど考えて楽しい会にして欲しい。

◆情報発信（ホームページと YouTube・SNS）について事務局から説明資料により説明。

委 員 残念ながら YouTube の視聴回数が少し鈍化し、「博物館モノ語り」も苦戦しているようだが、何か新しい工夫やプログラムを考えているか。

事務局 「博物館モノ語り」は担当者ごとに色々工夫しているが結果に結びつかないところがある。博物館ホームページで扱っているプログラム紹介の広報を考えている。

委 員 最近の学生は物を調べるときには TikTok で検索している。若者世代は、文字ではなくショート動画で情報を入手する特徴がある。授業で学生に映像を見せると 10 分過ぎると自分のスマートフォンで何か見始めるくらい、集中力がなくなっている。そのことを逆手に取り集客に結びつける方法として、ショート動画は多分に訴求力がある。既存のリソースを利用して既にある動画を 15 秒程度でインパクトのある内容にまとめショート動画にすると、若者に情報が届きやすくなると思う。

委 員 若者の文字離れということがあるのだろうか。学芸員さんの負担にならない形で、若者の興味を惹く方法を模索してほしい。

委 員 視聴回数にそれほどこだわらなくてもよいと思う。学びたい人にわかりやすい言葉で説明がされ、学べるような場が提供されていることが重要。

委 員 視聴回数ではなく、また違う方法で効果が検証できるとよい。SNS に投稿する究極の目的は何か。多数に見てもらうためではない。見たあとに次に何につながられるか、ではないか。

◆平塚市史年表編刊行について事務局から説明資料により説明。

- 委員 これだけ詳しい資料を 250 円で購入できるのは物価高の中で嬉しいことだが、販売価格をどのように算出したのか。
- 事務局 庁内印刷する場合は、かかった費用を発行部数で割出し計算すると、ページ数にもよるが 200 円から 300 円ぐらいの金額になる。
- 委員 今までの資料をすべて博物館に引継ぎ、市史編さん担当はなくなるようだが、博物館に移す資料はかなり多いのか。
- 事務局 市史編さん担当の資料を保管している中央図書館の大規模改修が令和 8 年度に始まるので、令和 7 年度中に廃園になった土屋幼稚園に資料を移して保管していく。
- 委員 市史刊行後は組織が消滅する自治体が多い中で、博物館が引き継ぐのは素晴らしい。市史に掲載された資料を見たい時にアクセスができるのか。また資料の目録が整備され検索できるアーカイブ機能や公文書館的な機能はどうなっているのか。
- 事務局 市史の刊行や日々の出来事の資料収集は進めてきたが、アーカイブ化、リスト化するまでは進んでいない状況。それらを進めていく必要性は認識しているが、すぐできるわけでもないのが今後の課題になる。公文書館的な機能は行政の総務部門の関わりが必要だが、平塚市では今のところ計画していない。
- 委員 アーカイブの整理作業は博物館として進めて行くのか。
- 事務局 今まで集めてきた資料を基に進めていく。
- 委員 市内の図書館や公民館で閲覧できるということだが、平塚市史は今まで小中学校にも配架していたと思うが年表を配布する予定はあるのか。
- 事務局 市内各小・中学校に加え高校にも配布する。
- 委員 小中学校の授業づくりに役立つのではないかと考えている。一般的な日本の歴史、小・中学生の分かるレベルの歴史に加えて地域史、郷土史を組み合わせやすくなる。
- 委員 ぜひ小中学校の先生方に『平塚市史年表編』の宣伝をしてほしい。興味ある方は購入すると思う。委員の話にあるように、子どもたちに教えるためには自分が勉強することも必要なので、先生方にアピールすると売上も増えると思う。

議題（２）令和 7 年度予定について

◆令和 7 年度当初予算について事務局から説明資料により説明。

- 委員 学芸員は学会に参加する機会が多いと思うが、教育普及活動推進事業の中にある旅費の予算が随分少ないように思う。学会は人脈づくりや新しい動向を見る重要な場なのでこの予算額は少な過ぎる。
- 事務局 分野にもよるが、この予算内で全国規模の研究学会団体に職員を派遣している。最近はオンラインで参加するパターンもあるので、贅沢を言えばきりがないと考えている。
- 委員 学会には自腹で行っている状況か。

- 事務局 自腹で行く場合と公費負担の場合とがある。
- 委員 職員が発表する場合の旅費はどうなっているのか。
- 事務局 団体が旅費を負担して学会参加するパターンが多い。
- 委員 博物館は学芸員が要なので、もう少し旅費の予算が増えてもよい。
- 委員 学会の個人会員になっている学芸員が全国で行われる研究大会に参加する場合は自腹になるのか。
- 事務局 個人会員の場合、参加したい意向があれば個人で休暇を取得して行く。館で加盟している日博協やJPAなどの出張旅費は公費負担している。
- 委員 一般的に大学などでは、個人会員でも学会に参加する場合は出張費も研究費として使える。博物館は曖昧な位置づけになっていて、個人会員なら自腹でというのは本来持つべき研究機能を充実させる役割を果たしているとは言えない。個人で入っている学会に参加する場合は、個人の研究だとしても研究費として出張旅費を出すことが本来あるべき姿だと思う。できればそのような形でお願いしたい。
- 委員 この金額では厳しい。学芸員数から逆算すると何回出張できるだろうか。県博でも状況は一緒に自分で研究費を持ってきている。学会だけでなく調査も含めると膨大な金額になる。数少ない予算でやり繰りするの仕方がない。
- 委員 宿泊研修の際、食事の時などは貴重な情報収集の場になる。食事に公費は支出できないと思うがせめて交通費は出してほしい。
- 事務局 学芸員は全国組織の学会や県内の研究会等、複数の学会に所属しているので、例会が頻繁にあると毎週のように学会に参加することになる。すべて公費で交通費を賄うことが妥当なのか、館の事業も重要なので、土・日曜日には博物館での講演や行事にもウェイトを置いてやらなければならない必要がある。すべての学会に参加してよいとなるとそちらへシフトし、ウェイトが傾いてしまう恐れもあるので、そこは交通整理をしながら管理・運営をしている。所属学会には休日や休暇を取得して参加することもあるが、発表者として依頼をいただいて出席することも多々ある。聴講だけで参加する場合、公費ですべて賄えないというのが実情である。館内でも懸案事項になっており、他館の運用方法等情報交換をしながら、良い形が取れるよう今後の検討課題にしなければと思っている。
- 委員 話を聞いていて、学会に休暇を取得して参加するということが引がかかった。学芸員の方たちの意識には、たとえ旅費が支給されなくても出張扱いできないのか。休暇を取得することに違和感を感じているのではないか。予算と博物館の業務も関わってくるので何とも言えないが。
- 事務局 個人研究は幅が広く、どこまでを仕事の一部と捉えるかによる。基本的には個人レベルの研究で、館として研究しているものと違うようならば公費は使えないと考えている。
- 事務局 学会出張と調査研究の部分と両方同じような基準である程度線引きしているが、フィールドワーク（現地調査）となると分野にもよるが、地域博物館として平塚市に還元できる調査テーマ

であれば、県外であっても出張として扱うことはある。ただし学問上は重要なテーマだが、沖縄とか北海道に関連があるから公務としてその調査を認めるというのは旅費や日数を考えても難しい。だからテーマと場所によって公費と私費のどちらが妥当かを、相談して決めている。

委員 私も他市で学芸員をしていたので、各々の事情は分かった上での意見。科研費（日本学術振興会の科学研究費補助金）の申請ができるような団体になるとすれば、学芸員の一人一人が研究費を持っていないとならないが、その研究費は自分の研究活動として使える。その予算があることが科研費申請できる条件である。それを踏まえた上で、個人的な研究だから関係ないということではなく、それが繋がり研究活動がベースになって博物館の活動が成り立つと考えることになる。科研費の申請をするかどうかは博物館ごとに事情も違うが、研究を重視して学芸員の個人的な研究も研究活動として位置付けて科研費の申請を考えていかなければならない。

委員 生命の星地球博物館でも事情は同じだが、予算がない中で科研費をもらうことに注力した結果なんとか予算化した。科研費のしくみとして、研究者だけが予算をもらうのではなく、施設全体に降りてくる予算もあるので、それで資料などを充実させていこうと力を入れた結果、学芸員の研究活動が基になり博物館全体の活動が高まった。そのようになるまで 10 年以上の時間を要している。

事務局 博物館活動は研究がベースで、展示や教育普及活動も研究ありきで成り立つものと認識しているが、科研費の研究機関指定を受けるためには、1 人あたりの年間研究費が 36 万円という要件がある。所属の 10 人の学芸員で予算化すると一体いくらになってしまうのかということも考えてしまう。

委員 科研費を取ると間接経費は館に入ってくる。研究機関が研究遂行に関連して必要とする経費だが、研究環境の改善や研究機関全体の機能の向上に活用される。管理や備品に充てられ、研究の副次的に必要な物を購入することができるので、科研費があると大きいと思う。申請は大変だが、1 度助成を受けると 3 年ほど続く。

委員 問題提起として考えてほしい。

◆令和 7 年度事業計画について事務局から説明資料により説明。

委員 特別展の展示演出だが、さきほども話に出たが「子育て地蔵」での念仏講の音は本当によかった。これから開催する特別展についても、例えば地質であれば、丹沢がテーマなので沢の流れの音やハンマーで岩を砕く音などを入れると良い。顕微鏡で実際の鉱物を見ることができるような工夫もすると良い。

事務局 子育て地蔵の会場でも伊勢原市で制作した 30 分程度の番組を放映したが、例えば地質分野でも、丹沢の岩石について関係者が解説した動画があると思う。沢の音やハンマーで岩を砕く音等は効果音として有効と思うので内部で検討する。

委員 天文の場合も宇宙の神秘を感じさせるような音があると良い。

◆事務連絡等

- 次回の協議会は令和 7 年 5 月 27 日（火）に開催することにした。

閉会后、春期特別展展示担当者が展示解説を行った。